三國志

卷の十一

三國志

一十の卷

吉川英治著

大日本雄辯會講談社版

（出版文化協會承認
あ480233號）

三國志 卷の十一

不許複製

昭和十八年四月十一日初版印刷
昭和十八年四月二十一日初版發行
（六〇、〇〇〇部）

㊟定價一圓二十錢

送料 内地（小包）十五錢
其他（四種）十六錢

著者 吉川英治
東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

發行者 高木義賢
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者 （東二〇）奈良直一
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所 株式會社常磐印刷所

發行所 株式會社 大日本雄辯會講談社
日本出版文化協會會員番號一一六五一五番
東京市小石川區音羽町三丁目十九番地
振替口座 五三〇〇
電話 東京三九三〇・牛込(34)代表六一〇〇・六二〇五(長)

配給元 日本出版配給株式會社（東京市神田區淡路町二ノ九）

重政製本

目次

麥城の卷

敗將……二
老將の功……一三
絶妙好辭……三〇
一股傷折……四〇

趙子龍……五一
次男曹彰……六三
鷄肋……七五
漢中王に昇る……九〇
烽火臺……一〇〇
生きて出る柩……一二四
關平……一三五
七軍魚鼈となる……一三九
骨を削る……一四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

建業會議……一五七
呂蒙と陸遜……一六四
笠……一七一
荆州變貌……一七四
鬢絲の雪……一八五
月落つ麥城……一九四
蜀山遠し……二〇一
草喰はぬ馬……二二五
國葬……二三一

成都鳴動……二三〇
梨の木……二三七
曹操死す……二四五
武祖……二五二
七歩の詩……二六三

裝幀　恩地孝四郎
挿畫　矢野知道人

麥城の卷

敗將

一

張飛の軍勢はすさまじい勢ひで進擊した。魏延、雷同を兩翼とした體勢もよかつたのだ。逃げ足立つた敵を追ひまくり、切りふせ、蹴ちらして、凱歌は到るところに揚つた。

張郃が自信滿々に構へた三ケ所の陣は、またゝく間に打破つて、三萬餘騎の兵力も、遂に二萬餘人を失つて、張郃自身、辛うじて瓦口關（四川省）にまで落ちのびて行つた。

痛快極まる勝戰は、張飛の鬱積を吹きとばして、なほあまりがあつた。早速に早馬を仕立てさせ、使者を成都の玄德に送つた。

玄德の喜悅も又ひとしほで、

『孔明の明や深遠、淸澄。關中の勝報、わが想外にあり。善哉、善哉』

と、膝をうつた。

瓦口關にまで逃げた張郃は、悲鳴をあげ曹洪に救援をもとめた。

曹洪はこの報せをうけると、烈火の如く怒つて、

『張郃わが命を用ひず、なまじ自信をもつた戰をして、要害を奪はれたのだ。今はわれに救援に送る兵なし、すべからく逆襲して、もとの本陣を奪取すべし』

と、峻烈な命を返してよこした。

曹洪の怒りを聞いて、張郃の驚き、怕れはひと通りでなく、新に計を樹てて、先づ殘兵を集めて二手に分け、瓦口關の前に伏せ、本陣は尙も退却と見せかければ、張飛必ず追ひ來るに違ひなし、そのとき一せいに打つて出で、敵の退路を遮斷すれば、挽回の端緒を得べしとなした。

『ものども、ぬかるなッ』

と、嚴命して、自ら一隊を率ゐ、敵前に進み出た。

これを見た蜀の大將雷同、馬を飛ばして來て張郃にうつてかゝつた。

御參なれ、と二三合うち合つた上、豫定の如く張郃は逃げにかゝつた、雷同は猛つて、逃がさじと追つて來る樣子に、張郃ひそかに喜び、ころもよしと合圖をすると、魏の伏勢一度に起つて、雷同の退路を斷つた。

『圖られたかつ』

と、氣づいて、馬を回さうとするところを、張郃はにはかに追ひかゝつて雷同を斬つてしまつた。

このさまを見てゐた張飛は、怒髪天をつき、馬を走らせて張郃に迫つた。張郃は味をしめ、張飛としばしわたり合つては、逃げて誘はうとしたが、今度はこの計略もきかず、追つて來ない。やむなく、張郃は戻りかへつて刄を合はせては、一間でも二間でも引込まうと骨を折つたが、張飛は限度を超えて深追ひせず、そのうち馬首をめぐらして本陣に歸つてしまつた。

引上げた張飛は、早速魏延を呼びよせ、

『張郃め、まんまと計りをつて、雷同の勢ひ立つて深入りしたを、伏兵をもつてあざむき殺してしまつた。いま一戰を交へて、雷同の仇を討たうとしたが、敵に計のあるを見て引返した。敵の計には計を以てせねばならぬと考へるが』

『して、そのお考へは』

魏延は友將を失つて、氣色ばんで訊ねた。

『うむ、われは一軍を率ゐて、明日、また正面より張郃にいどむ、汝は精兵をすぐり、敵の伏兵が、われの深入りを機會に、わが退路を斷たんとするとき、山間に伏せて急に兵を二手に分け、敵の伏兵にあたり、一手は車輛に乾草を山と積んで小路をふさぎ、これに火をつけよ。張郃を擒にして必ず雷同が仇を討つてみせる』

魏延は喜び勇み、輩下の精鋭をすぐつて、配備についた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

翌日。

張飛堂々と軍を進めて魏軍の正面を攻めた。

張郃はこれを見て、こりずに又やつて來をつたかとばかり、みづから馬を進め、交戰十合ほどにして、けふも、逃げの手をつかつた。しかるに、來まいと思つた張飛は、兵と一緒になつて追つて來る樣子である。張郃はひそかに喜んで、伏兵の配陣よろしき地勢まで逃げた。

こゝは山の腰のあたり、路は一筋、退路を斷てば、敵の首筋を握つたと同然の地の利である。

『よし』

と、思はず息を彈ませ、馬首をめぐらし、追ひ寄せ來た張飛の軍めがけて、一度に逆襲の形をとつた。

二

雷同を討つて、全軍氣をよくしてゐる矢先である。けふ目指すは張飛だ。張郃の下知は、水ももらさず行きわたつて、見事に見える。

本軍と意氣を合せ、伏兵も忽ち左右から起つて、張飛の後を遮らうとしたが、何ぞはからん、目の前に立ちふさがつたのは蜀の兵であつた。逆に虛をつかれた張郃の兵は、忽ち亂れ、さんざ

んに打破られ潰え、谷の中に追ひ込まれてしまつた。

その上に、柴の車を以て細道を塞ぎ、一齊にこれに火をかけたので、火焔は天に冲し、草木に燃えうつつて、黒煙は土をおほひ、張郃の兵は山中を逃げまどつたが、森林地帶ではあり、思ふに任せず、遂に一人も殘らず燒死してしまつた。

この一戰は、終始張飛の壓倒的な優勢裡にすゝめられて、殘り少い敗殘の手兵をあつめ、張郃は、命からがら瓦口關にのがれ、よぢ登つて、あたふたと門を閉ぢて、こゝを死守すべく嚴重に守つた。

魏延を率ゐて、こゝ迄追ひつめた張飛は、一氣に此の關も破るべく、數日にわたつて攻めたが、流石、名ある瓦口關である。要害は堅固で、又地勢嶮阻を極めて、搖ぎもしない。

張飛は正面攻擊をあきらめ、二十里後方に退いて、陣を構へ、みづから手兵數十騎を選び伴ひ、山路の偵察を行つた。

ある日。

山道からふと見ると、百姓らしい男や女が幾人か、背に荷を負ひ、藤蔓にしがみつき、あるひは葛にとびついたりして、山を越えてゆく姿が張飛の眼にとまつた。

張飛はこれを見て、魏延を側に招き、馬上に鞭を上げて、

插一 东面人

『魏延、あれを見たか。瓦口關を破る策は、あの百姓たちが訓へてくれるに違ひない。それより他に破り得ることは不可能だ』

と、確信に溢れた言葉。

魏延は直ぐには、この意味が解し得ない様子で、

『……』

遙かに山上に姿を消してゆく人影を見送るばかりであつた。

『誰か、直ちにあの百姓を追ひかけ驚かさぬやうにして、こゝへ連れて來い』

と張飛は命じた。

間もなく、兵は六名ほどの百姓を連れて來た。若い者も、老人も混つてゐて、いづれも何か怯えた顔を土につけた。

張飛は、靜かに、つとめて優しく、

『お前たちは、どうして、こんな嶮しい山路をたどつて、この山を越えようとしてゐるのか』

と、訊ねた。

年のいつた百姓は、代表の格で幾分たじろぎながら、

『はい、わたくしたちは、みんな漢中のものでございますが、いま、故郷へ歸らうと此處まで參

りますと、なんでも、本道には激しい合戰があると聞きましたために、蒼溪をすぎて、梓潼山の檜釿川から漢中へ出ようと相談致しまして、此の山へかゝつた譯でございます』

と答へた。

『うむ。』

大きくうなづきながら、張飛は再び質問を發した。

『この路は、瓦口關と餘程離れてゐるか』

『いや、それ程ではございません、梓潼山の小路は、瓦口關の背後に通じてをります』

老人の答へは、思つたよりはつきりしてゐた。この答へに、張飛はいかばかり喜んだか知れなかつた。百姓たちを本陣に連れて歸りそれぞれ褒美を與へ、酒をふるまつて犒つた。

張飛は魏延を呼び寄せ、

『早速に兵を率ゐ瓦口關正面に攻めかゝれ、われは、あの百姓を案内とし、精兵五百あまりをひきつれ、小路を走つて敵が背後に廻り、一氣に張郃の軍の殘餘を潰滅せしめよう』

と、全軍に下知し、張飛はすぐりの兵をつれ、魏延と瓦口關に勝利の再會を約して、左右に別れて發足した。

三

瓦口關に構へて一息ついてゐた張郃は、幾度かの敵襲も、堅固な關の救ひに小搖ぎもなく、事なく濟んだが、さて援軍が來なければ、此處から一歩も動きがとれない、ひたすら援軍を待つばかりであつた。

しかし、待てど、暮せど、友軍の來さうな氣配が見えない。

日の經つにつれて、追々と心細くなつて來るのを、どうすることも出來ない。物見を四方に立て、一刻も早く援軍來るの報を得ようと焦つてゐる矢先、

『只今、關の正面に軍馬らしきもの近づいて參りました』

と、物見の報告である。

『何、友軍か？』

『しかとは分りませんが、魏延の兵と覺えます』

『何つ！』

張郃は顏色を變へたが、魏延の軍、いかに攻めようとも、又過日の悔を再び味ふのみ、と努めて平然と、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com